

コラム 3 サロスぶりの蘇生

編集委員長 作花一志

「京大農学部グラウンドには 8000 人集まったそうやで！」

「うそ〜1 ケタ間違いとちゃうか！」

こんな会話が京都で交わされたが実数は不明のままである。25 年ぶりの、いや 129 年ぶりの、いや 282 年ぶりの、いや 932 年ぶりとも言われる金環食をはたして何人の人が見たことだろうか。観望会や観測会でなくても通勤途中の電車の中から、朝食の後からづけをしながら窓越しに眺めた人も含めるとわが国で数千万人、さらに早朝の中国と日没のアメリカを含めると 1 億人近くの人が眺めたことだろう。また、撮られた日食画像の総容量は何テラ（いやペタかエクサか）バイトになったのだろうか。画像・動画は世界中を飛びまわった。観測・観察規模ではもちろん有史以来最大の日食である。いや空前絶後かもしれない。

また日食の専門研究者、日食ハンターでない限り、天文屋でも金環食を眺めるのは今回初めてのことだろう。その一人である筆者は雲間の金環を観ているときに、3 サロス前 1958 年 4 月 19 日の日食（その地点では食分 0.86 の部分食）のおぼろな記憶が蘇ってきた。あの日は快晴で、みんな一緒に校庭で黒い下敷きを通して見た。そして日食時には空が暗くなったような微かなおぼえがある。かつての天文少年であった同世代諸氏に尋ねても、あの時はたしかに空が暗くなったと言う。上記の日付は最近になって調べて分かったこと、デジタル記憶は消滅する。さらに、子供のころの記憶は美化され増幅されるものであてにならんもんだ。皆既でないのに暗くなるはずがないと思ってきた。「ある夜突然現れて長い尾を引いていた」大彗星や「雨が降るかのごとき」大流星群の場合も同じである。

ところが、アナログ的な言い方ですが実際は暗くなりましたね、意外でした。やっぱり実際に自然に触れて体験することが重要だと痛感しました。TV やインターネットライブなど日食そのものを再現してくれる技術はたくさんあるが、生の現象を観るにはかなわないのですね。

また「天俄かに曇りて墨の如く云々・・・」などの天文古記録や天文絵ももっと評価してもいいのではないかと感じた。西欧は近代まで天文記録が少なく、また脚色されているものがあるが、わが国の平安公家（典型的な有識有閑人）の日記にはかなり客観的な天変の記載が多い。古文漢文に苦手意識のない方にお勧めです。

今年は金環日食、金星の日面通過という天象が続いて起こり、天文普及には絶好の機会だった。もうしばらくわが国からは大日食は見られないし、マスコミの話題になるような天文現象は起こらない。これを契機に星空へ関心を持った人は多いだろうが、その機運をいかに活用していくかは、今後の私たちの課題だろう。